

東京は今、ちょっとしたフランス・ブームで沸き返っている。

上野の国立博物館では堅固な護衛の下に遠来のモナ・リザが毎日平均2万人の入館者を導引しているという。連休には、お隣の動物園の人気者パンダの観客数にかなわぬ日もあったそうだが、中国生れのパンダは日中交友の印として全面的に中国側から贈呈されたのであり、モナ・リザは日仏交友の記念にと日本側が少々強引に要請したものである。それらが一挙に中国と日本、日本とフランスの個々人のつながりを深めるのに役立つとは思われない。今のところは単に、日本人の好奇心を満たす好材料にされているだけである。しかしながら、それらは矢張り見るべき人にとって一見に価するものであるには違いない。百聞は一見にしかず。

この東京にわか文化の流れは当然、西にも波及する。4月16日午後のフランスからのお客様、それが今日の主人公である。

ルネ・ユイグ氏夫妻。同氏は、1950年までモナ・リザを所蔵するルーブル美術館の絵画部長の要職にあり、現在はコレージュ・ド・フランスの教授である。コレージュ・ド・フランスは普通の大学では得られない独創的な授業内容を持つところとして大学以上のランクを与えられているという。全科が公開講座システムであり、決められた登録手続き一つで誰もが聴講できるという。さすがフランスならではのユニークな超大学である。同氏はここで「造形芸術の心理学」を教授していただける。「芸術の意味と運命」「見えるものとの対話」「芸術と魂」「イメージの力」また『レオナルド・ダ・ヴィンチーモナ・リザ』などの著書で日本の専門家にも良く知られている。同氏自身、美術

有朋自遠方来

館員養成のための専門学校であるルーブル学院を卒業され、永年美術館の経験を持たただけに美術館への関心も深い。折しも開かれていた当館の名品展においても狩野元信筆奔湍図、雪村筆呂洞賓図など力強いものへの関心を示され、芸術心理学的な興味の深さを我々に感じさせた。

東京池袋の東部デパートで催されていた「モローとその弟子たち」の展覧会に因んで同デパートが招待したという。東京各地で講演され、15年振り、2週間の日本滞在であった。同氏の著書「イメージの力」の訳者でもある神戸大学の池上忠治氏が案内役として同行された。写真はルネ・ユイグ氏夫妻と池上忠治氏（左）。



季刊 美のたより No.28

昭和49年6月1日

発行 大和文華館